✦ 奥田あやと囲碁体験 ✦

指導者も必読！ ゼロから分かる

入門エッセンスセミナー

奥田 あや 三段

time 8

こんにちは。本講座もいよいよ今回と来月号分を残すのみとなりました。前回から、入門者同士がハンディなしで対戦する「互先」の実戦解説を行なっています。

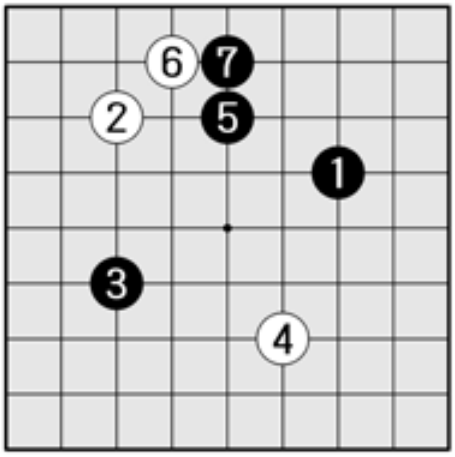
最終回となる来月号では９ヵ月間の総まとめをするつもりでいますので、新しいことをお話しするのは今回が最後。つまり今回の内容をマスターしていただければ、皆さんはすでに「囲碁が打てるようになっている」ということに他なりません。

ということなので、今回もよろしくお付き合いください。まずは前回内容の確認からです。

前回のおさらい

第１譜　黒１、白２、黒３、白４と、いずれも隅から打ち始めたのは「隅の方が効率よく地を囲うことができる」という利点があるからです。そして黒５は「右上一帯に地を囲いたい」と考えた好手でした。

続く白６も「左上隅を地にしたい」と考えた好手。囲碁を打つにあたっては、このように「○×をしたい」という意思が非常に大切で、こうした意思を持つことがス



第１譜

Profile おくだ　あや

東京都出身。大淵盛人九段門下。平成16年入段。23年三段。東京本院所属。第27期女流本因坊戦挑戦者決定戦進出。第22期女流名人戦リーグ入り。第４回大和証券杯ネット囲碁レディース準優勝。

ムーズな上達に繋がります。黒７も「右上にできそうな黒地を固める」との考えで、両者とも素晴らしい立ち上がりと言えるでしょう。

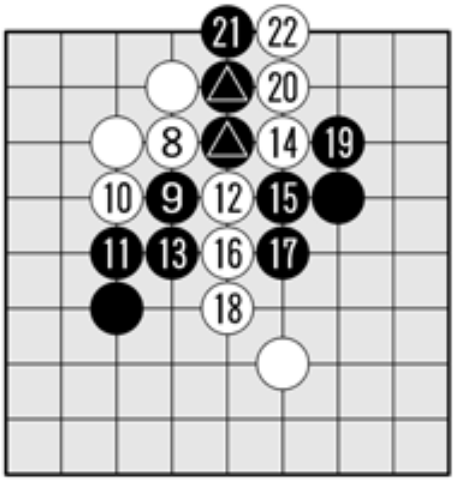
第２譜　白８、黒９以降、石が接触し始め、白12の切りからいよいよ本格的な戦いとなりました。

そして最も注目すべきは黒19の一手。白14の一子をアタリにした手ですが、白20と逃げ出す手が逆に△二子をアタリにするというところまでは見抜けていなかったようで、黒21と逃げても白22まで、黒三子が取られてしまいました。

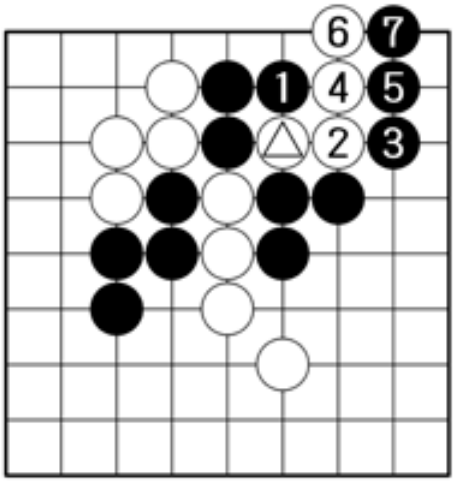
つまりは黒19が失着だったということで、この手では**１図**の黒１と、こちらからアテていれば、△一子を取ることができていました。白２と逃げてきても、黒３、５、７と追いかけて取ることができます。

実戦（第２譜）と１図をよく見比べてみてください。アテる方向が違うだけで、結果は見事に正反対となっていますよね。

こうした例は実戦において、実に多く出現します。従って「アテる方向にはくれぐれも注意」――これが第１の注意点です。



第２譜



１図

★　編集室からのお知らせ　★

本コーナーでは、４月号から入門講座を連載しておりますが、今月号（11月号）以降よりご購読いただいた場合、内容が途中からになってしまいます。そこで本講座に限っては、幣院ホームページのトップ画面中段にございます出版最新情報から「囲碁未来」誌のロゴをクリックいただき、そこからこれまでの記事をＰＤＦにて確認できるようにしております。ぜひ新規ご購読者のみなさまにおかれましては、以下にまでアクセスいただければ幸いです。

上記のロゴをクリック

URL　http://www.nihonkiin.or.jp/publishing/mirai.html

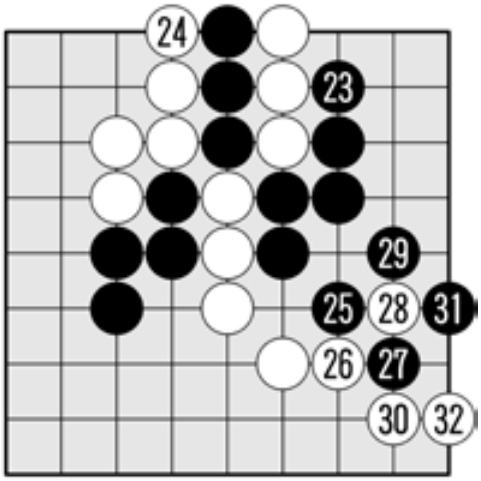
第３譜　取られてしまったものは仕方がありません。気持ちを取り直して黒25と転戦したのは、素晴らしい判断でした。「右辺を黒地にしたい」という考えで、その意思は黒31まで、着実に実行することができたと言えるでしょう。

白32が、第２の注意点です。

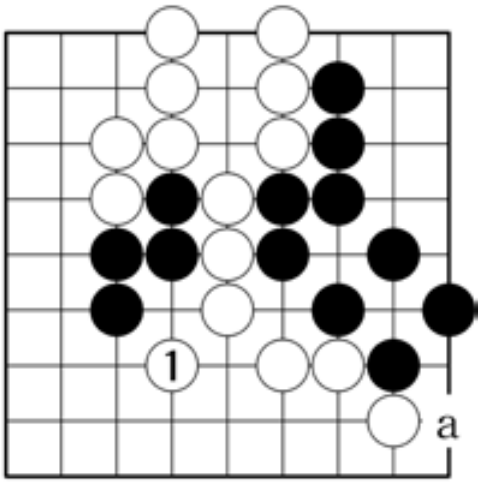
この手は碁盤の端っこで、それほど大きな価値のある場所ではありません。対局者のお２人とも入門者ですから仕方ないのですが、局後に「この手では**２図**の白１と打った方が良かったですよ」と指摘したところ「なるほど、実戦のように白ａと端っこを打つよりも、下辺の白地が大きくなりそうですね」と納得してくださいました。

実はこの「大きくなりそう」に代表される「○×になりそう」という〝感覚〟が、囲碁においてはとても重要なのです。「囲碁は感覚のゲーム」という言葉さえあるくらいですから……。感覚に基づいて着手を決定し、それでうまくいかなかったら反省して修正していく――この繰り返しが上達へと繋がっていくのです。

ここまでが前回の内容でした。



第３譜



２図

指導者の方へ①

第１譜から第３譜までの手順中、指導者である皆さんの目から見れば、問題手が山のようにあるはずです。「すべてが問題手」に見えてしまっている方もおられるかもしれません。

ですが、そこでグッと我慢をしていただきたいと思います。対局しているのは入門者なのですから……。

今はまず「囲碁とはなにか」「終局とは何か」を理解してもらうことが最優先事項ですので、その本線から外れたことに関しては、最低限のアドバイスに留めるのがベストでしょう。

厳密に言えば疑問手であったとしても「～したい」という意思や方向性が間違っていなければ、それは入門者にとっての正解手――そのように指導していただければと思います。

一石二鳥を逃す

第４譜　黒33と白34――結論から先に言えば「ともに問題手」です。

しかしこの２手には、入門者が陥りがちな要素が如実に表れているので、しっかりと説明を加えることにしましょう。

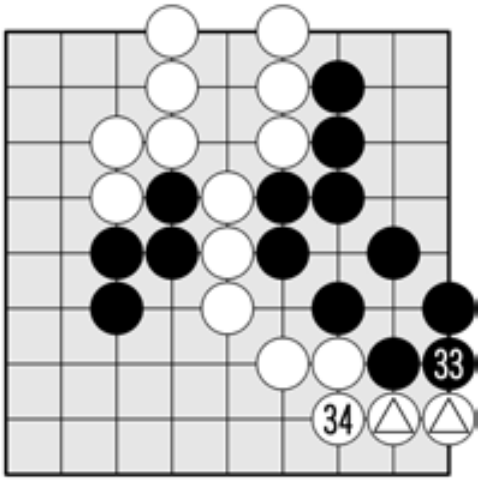
まずは黒33ですが、**３図**の黒１と左下に先着してしまうのが正解でした。「左下隅の黒地を増やしつつ、下辺の白地を削減する」という一石二鳥の好手であることがお分かりいただけることと思います。

そして大事なのは「右下隅は白２と打たれても黒３とツナいでいて、何の問題もない」という点です。つまり右下隅は急ぐ箇所ではなかったということで、左下方面の方が価値が大きかったのです。

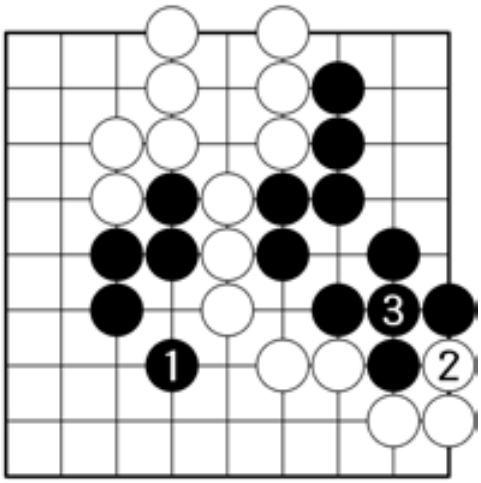
同様のことが、第４譜の白34にも言えます。この手では**４図**の白１と、やはり左下に先着するべきでした。「下辺の白地を増やしつつ、左下の黒地を削減する」という、やはり一石二鳥の好手ですよね。

ただし白が実戦（第４譜）の34と打ったのには、きちんとした理由があったようで、局後に「放置しておくと△二子を取られてしまうと思ったので、白34と守った」とのことでした。

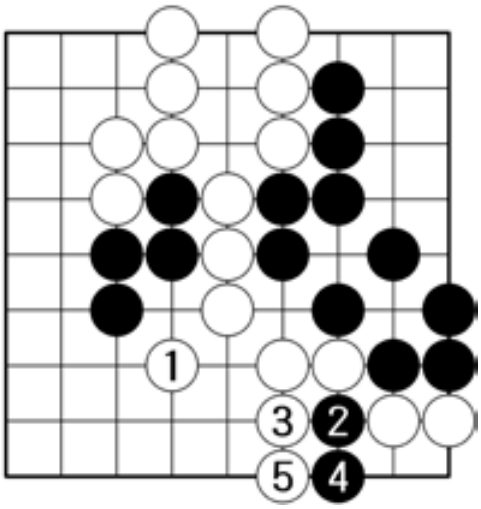
つまり４図の黒２と切られることを心配したのですが、実際は白３から５とアテて取ることができました。ゆえに「第２譜の白34が疑問手」となるのですが、ご自身の中できちんとした理由があって守ったのですから、それはそれで特に非難すべきものではありません。今回の失敗で「こういう所は手を抜いても大丈夫なのだ」ということが分かったのですから、この反省を次回に活かせばいいのです。



第４譜



３図



４図

ほぼ順当に終盤へ

第５譜　懸案だった左下ですが、ついに黒が35と先着することになりました。

ここに手を回すことができたのは実に大きく、立ち上がりの上辺における失敗を取り戻した感があります。

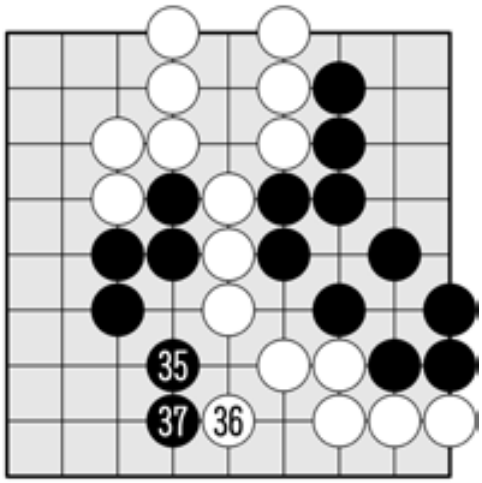
対する白36は「下辺の白地を増やしつつ左下隅の黒地への侵入を窺った」好手。その左下隅への侵入を「許さない」との意図で打たれた黒37も好手です。

そしてここまで進行してみると、お互いの地の分布がほぼ確定したことが判明してきました。黒地は右辺と左下、白地が上辺と右下ですね。

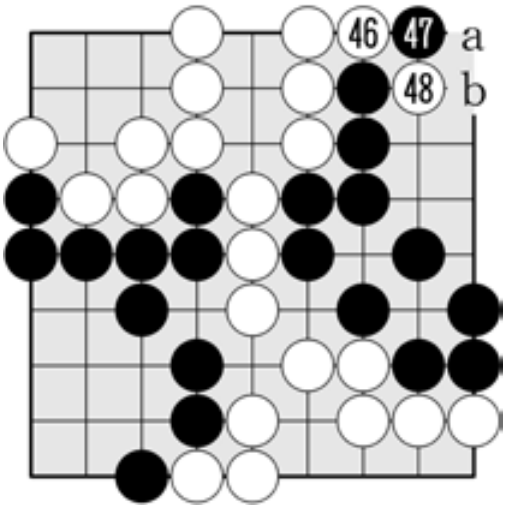
というわけで、あとは互いの地が接している境界線の整備です。その意味で――、

第６譜　白38から黒45の進行は、両者ともなかなかでした。着実に双方の境界線が埋まってきています。

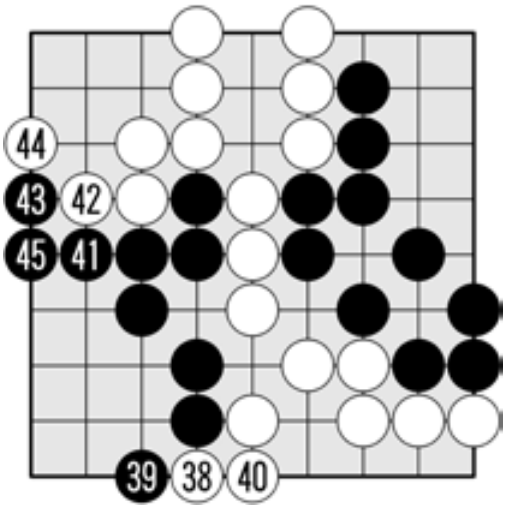
第７譜　白46に対する黒47は失着。白48と切られて黒石がアタリに……。黒ａと逃げても白ｂで助かりません。従って黒47では、**５図**の黒１、３と譲歩すべきでした。



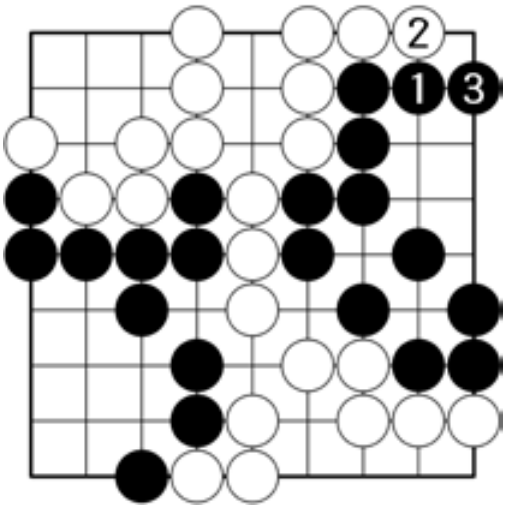
第５譜



第７譜



第６譜



５図

「白３目勝ち」で終局

第８譜　△一子はもう助かりません。従って黒49、51と被害を最小限にとどめたのは賢明な判断でした。最善の処置と言っていいでしょう。

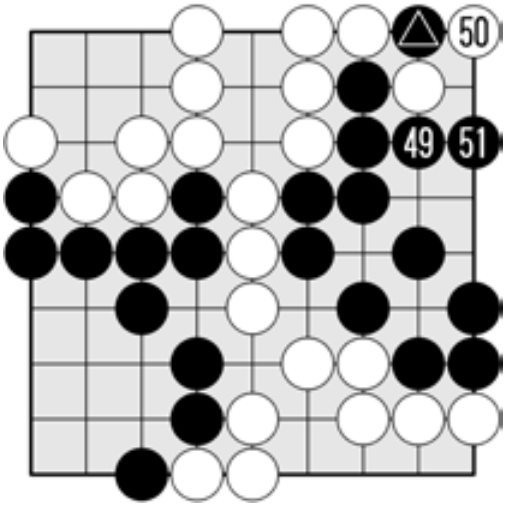
囲碁ではこのように「取られてしまった石にこだわらない」考え方がとても重要なのです。

第９譜　白56まで進行したところで、黒のＡさんが「パス」を宣言しました。「もう打つべき箇所がありません」との意思表示ですね。

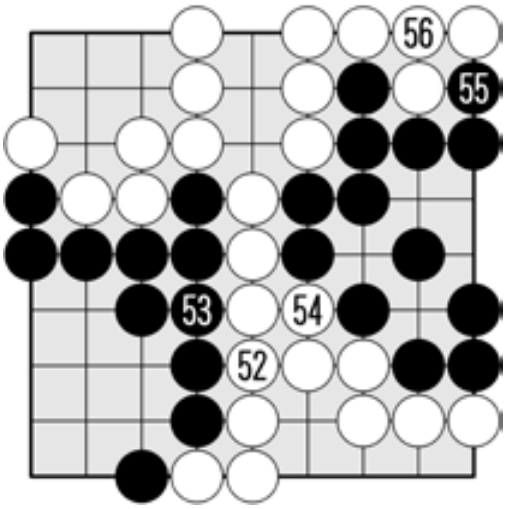
対して白は「打つ箇所がある」と思えば着手することはできましたが、Ｂさんもしばらく考えたのち「パス」を宣言。「両者のパスをもって終局とする」というルールどおり、これにて終局となりました。

そして双方の地を数えた結果（もちろん双方のアゲハマで相手の地を埋める作業もしました）、盤上には11目の黒地と14目の白地が残りました。

従って本局は「白の３目勝ち」という結果に終わったことになります。



第８譜



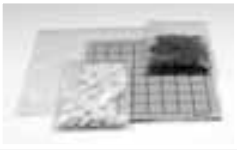
第９譜

＊＊＊九路盤セットと十三路盤セットのご紹介＊＊＊

十九路盤のセットはお近くのおもちゃ屋さんや、小売店などで比較的簡単に購入できるが、九路盤や十三路盤セットとなると、店頭でみかけることは難しい。東京、大阪、名古屋ならば、日本棋院の東京本院、関西総本部、中部総本部があるのでぜひ一度足をお運びいただきたい。

遠方の方にご利用いただきたいのはインターネットを使った日本棋院オンライン囲碁ショップや、電話注文・FAX注文対応の通信販売である。

写真❶の九路盤セット（￥1,470）は、裏は七路盤として、また写真❷の十三路盤セット（￥5,250）は裏は九路盤としても使え、さらに携帯性も抜群でお値段も手ごろ。まさに囲碁の入門キットとしてはうってつけの人気商品だ。



❶九路盤セット ￥1,470

❷十三路盤セット ￥5,250

●本院
千代田区五番町7-2
ＪＲ・地下鉄市ヶ谷駅より徒歩1分

●八重洲囲碁センター
中央区八重洲1-7-20　八重洲口会館９Ｆ
（東京駅八重洲地下街直通）

●関西総本部
大阪市北区角田町１番12号
阪急ファイブアネックスビル６Ｆ

●中部総本部
名古屋市東区橦木町1-19

●日本棋院通信販売センター
TEL　03-3288-8788（平日9:00～17:00）
FAX　03-5275-6844（年中無休 24時間受付）

●日本棋院オンライン囲碁ショップ
http://www.rakuten.co.jp/nihonkiin/

「終局の定義」について

ご覧いただいたように、この碁は「白の３目勝ち」で終局しました。しかし経験者の方が本局を見れば「まだ終局していない」と口を出したくなることと思います。

６図、白１の切りですよね。この一手によって△一子がアタリとなりました。

そしてこの△は、黒ａと逃げても白ｂと追いかけられてしまうので、もう助かりません。すると左下隅の黒地が崩壊してしまうわけで「白３目勝ち」どころの話ではなくなってしまうということです。

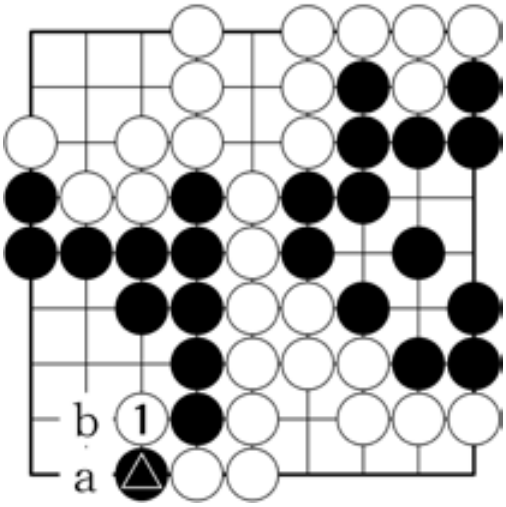
従って黒は**７図**の１と、ここを守っていなければなりませんでした。すると黒地が１目減っているので「白４目勝ち」ということになる――いずれにしても「白３目勝ちという結果はおかしいだろう」という意見が出てきて不思議ありません。

確かに、理屈としてはそのとおりなのですが、それでも私は「白３目勝ちで問題ない」と考えています。

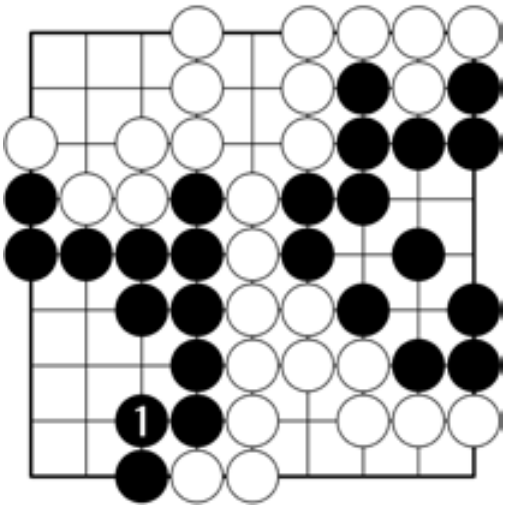
なぜなら「双方のパスをもって終局とする」というルールが存在するからです。手が残っているかどうかではなく、両者がともにパスをしたかどうかなのです。

手が残っているかどうかについては、対局者の力量が大きく関わってきます。強い人から見れば手残りでも、弱い人にはその手が見えません。その点も含めての「対局結果」だと思うのです。

実際、私がアマチュアの方の対局を見ていて「ああ、手が残っているのに……」と思うことは多々あります。でも対局者がともに「手なし」と思っているのですから、そこで私が「本当は手が残っているので」と口を出すのはおかしな話です。それによって勝敗が引っくり返ってしまうケースもあるはずですから……。



６図



７図

それは経験者と入門者の間であっても同じことで、入門者同士が「手なし」と判断して「終局」と認め合っているのですから、これは立派な終局です。そして何より、入門者同士が二人だけで「終局と認め合うことができた」という事実こそを、貴重なものとして尊重すべきでしょう。

手が残っているか否かの問題などは、両者が強くなっていくことで自然と解消する問題なのです。

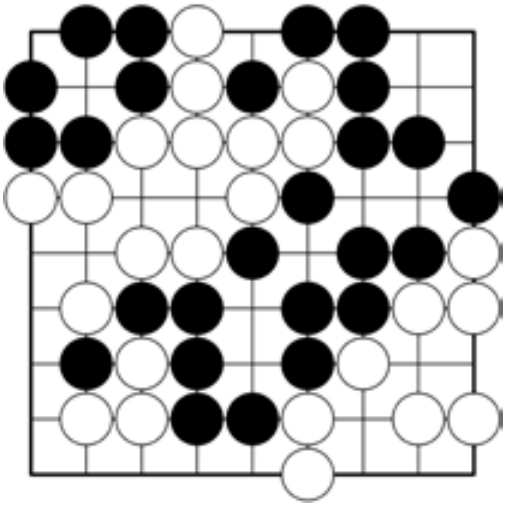
最終回予告

前ページで「実際には手が残っていても、両対局者が〝手なし〟と判断したなら、それは立派な終局」という、私の考えをお話ししました。

とはいえ、きちんとした終局ができるに越したことはありませんし、それができていないと、いざ地を数えるべくアゲハマを埋める際にトラブル発生となってしまいかねません。

というわけで来月号の最終回では「本当に終局ですか？　問題集」に取り組んでいただくことで、本講座の締めとすることにします。

右の図は、その中の一問。厳密に言うと、この図はまだ終局していません。



最終回テーマ図

つまりは「まだ着手の余地がある」ということですから、来月号を手にするまでに「着手可能な地点はどこなのか」を考えておいてください。

指導者の方へ②

今回お話しした、終局についての内容――「厳密に言えば手が残っていても、両者が合意したのなら終局」という点は、本講座の中で最も強調しておきたかった部分の一つでした。

この問題は、これまでも度々指摘してきました「教え過ぎに注意」と深く関連しているのですが、両者が終局と思ったのに「本当はこういう手があってね――」と口を出してしまうと、入門者はもう訳が分からず、パニックになってしまうのです。

仮に手が残っていて、あちこちの境界線が定まっていないとしても、両者が自力で「終局」という判断を下したのですから、その「勇気」を尊重してあげてください。

整地の際に問題が発生してしまうかもしれませんが、それでもまずは本人たちに「アゲハマで地を埋めて、双方の地を数える」という体験をさせてあげることが最優先でしょう。最初からうまく整地はできないと思われますので、その時にうまくサポートをしていただければと思います。

最初からすべてをきっちり教えようとしてしまうと、指導者の熱意に反比例するかのごとく、入門者の囲碁に対する興味は冷めていきます。これは間違いありません。

自分をどれだけ入門者の目線にまで下げることができるかが、囲碁入門指導における最大のポイントではないでしょうか。